



日本を今一度
せんたくいたし
申し候



テーマ／坂本龍馬と北海道
講師／北海道龍馬記念館長 三輪貞治 氏



坂本龍馬について



坂本 龍馬（さかもと りょうま）

（天保6年〔1835〕11月15日— 慶応3年〔1867〕11月15日）

幕末の日本の政治家・実業家。土佐藩（現在の高知県）脱藩後、貿易会社と政治組織をかねた「亀山社中」や「海援隊」を結成するとともに、「薩長同盟」や「大政奉還」の成立に活躍し、戦争をせずに日本の近代化を進めるために、偉大な功績を残しました。

また、ユーモアあふれる多くの手紙を書いたり、日本で初めて新婚旅行を行うなど、その温かい人柄によって、国民的人気を誇っています。

坂本龍馬は、北海道開拓をめざして行動していましたが、残念ながらその夢はかないませんでした。しかし、のちに子孫の人々が龍馬の意志をうけつぎ、北海道に移住しています。

龍馬を描いた作品としては、司馬遼太郎の小説『竜馬がゆく』や、アニメ『お〜い竜馬!』などが有名で、2010年のNHK大河ドラマ『龍馬伝』も大変話題になりました。



龍馬の姉・乙女とめ

身長175センチ、体重113キロもあり、「坂本のお仁王（におう）様」とあだ名されていました。乙女は母・幸（こう）の死後、幼い泣き虫の龍馬の将来を心配し、一人前に育てたと伝えられています。



勝海舟かつかいしゅう

咸臨丸（かんりんまる）艦長としてアメリカに渡った経験のある勝は、欧米の軍勢力が強大であることを知り、日本も経済力や軍勢力をつけ、欧米に対抗できる国をつくるべきであると考えていました。



西郷隆盛さいこうたかもり

薩摩藩（さつまはん）の中心人物。龍馬が西郷邸に滞在中、西郷の妻・糸子に「一番古いふんどしをくださらぬか」と頼んだ際、糸子はその言葉通り西郷の使い古したものを渡したところ、帰宅した西郷が、「（龍馬が）お国のために命を捨てようという人だということがわからないのか」と糸子をしかり、すぐに新しいふんどしを準備させたというエピソードが伝えられています。



お龍りょう（土居晴夫氏提供）

薩長同盟を成立させ、京都・伏見の宿・寺田屋（てらだや）でくつろいでいた龍馬を幕府の役人がおそいました。その時、寺田屋で働いていたお龍は、入浴中にもかかわらず、命がけて龍馬に敵が来たことを知らせました。そして大けがをした龍馬をつきっきりで看病したのもお龍でした。その後二人は結婚し、日本で初めてといわれる新婚旅行に行きました。

坂本龍馬と北海道との深いつながり

Q. 龍馬が蝦夷地（北海道）開拓を目指した理由は？

A. 龍馬が慶応3年（1867）に書いた手紙には、“私は北海道に渡り、新しい国をつくるのが積年の思いであり、たとえ一人でもやり遂げるつもりです”という決意を記した一節があります（下部参照）。

このように、龍馬にとって北海道開拓は悲願ともいえるもので、勝海舟の弟子となって間もない頃から亡くなるまで取り組み続けていました。

その目的は、京都に集まっていた過激浪士たちや、大政奉還後に職を失うであろう若い武士たちの暴発を防ぎ、その大切な命とエネルギーを北海道の開拓と防衛に当たらせようという壮大なもので、いわば屯田兵制度の原型といえるものでした。

Q. 函館と龍馬の関係は？

A. 龍馬の片腕として活躍し、後に養子となった甥の坂本直（幼名は高松太郎／箱館在住時の名は小野淳輔）は、慶応4年、五稜郭に置かれた箱館裁判所（後の箱館府／今年復元される箱館奉行所の建物）の役人として赴任し、箱館戦争にも従軍しています。龍馬の後継者である直がその第一歩を記した場所が箱館（現函館）だったのです。

また、龍馬の縁戚にあたる澤辺琢磨も箱館に渡っています（NHK大河ドラマ『龍馬伝』第9話にも登場）。山上大神宮や函館ハリストス正教会などに足跡を残し、日本人として初めてロシア正教の洗礼を受けると共に司祭にもなりました。

函館はペリー来航や箱館戦争など、北海道において幕末維新の歴史を持つ唯一の土地です。もし龍馬が暗殺されなければ、当時の箱館に渡っていたことは間違いないでしょう。

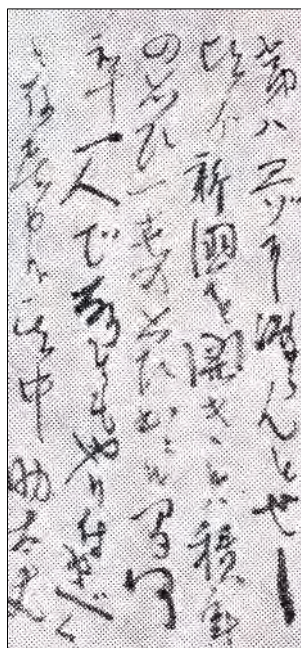
Q. 北海道に坂本家を移したのは誰？

A. 明治31年（1898）には、直の弟である坂本直寛（本家5代目）が家族共々北海道に移住し、以来坂本家は本道に根を下ろして現在に至っています。

菓子メーカー「六花亭」の包装紙の絵で全国的に有名な山岳画家・坂本直行は直寛の孫で、本家8代目に当たります（龍馬の甥の孫）。

龍馬の手紙

（慶応三年三月六日 長府藩士・印藤肇宛て）



京都大学附属図書館蔵
平尾道雄監修『坂本龍馬全集』光風社書店より

小弟ハエゾ（蝦夷）に渡らんとせし
頃より、新国を開き候ハ積年
の思ひ一世の思ひ出に候間、何
卒一人でなりともやり付申べく
と存居申候。

龍馬の志を継いだ人々

龍馬が目指した蝦夷地開拓への想いは、彼と共に亀山社中や海援隊で活躍し、後に龍馬の跡目を継いだ甥の坂本直（高松太郎）から、坂本直寛へと引き継がれていった。

坂本直は龍馬亡き後、蝦夷地経営に関する建白書を明治新政府に提出。慶応4年（1868）に五稜郭に置かれた箱館裁判所（後の箱館府／当時の北海道における地方行政機関。現在の司法機関とは異なる）において権判事となり、新政府軍の一員として箱館戦争にも従軍している。また、龍馬の再従兄弟にあたる澤辺琢磨も箱館に渡っている。

坂本直寛は、同志と共に合資会社・北光社を設立して北見の開拓に着手し、明治31年（1898）に浦臼へ移住。以後、開拓と伝道にその生涯を捧げた。

菓子メーカーの包装紙の絵などで知られる山岳画家・坂本直行は坂本家8代目にあたり、龍馬が新天地として夢見た北海道の自然をこよなく愛し、生涯にわたって描き続けた。

龍馬が目指した未来は北海道という新天地に向かい、その想いは坂本家子孫の人々を通じて今もこの地に生き続けているのである。



北海道移住直前の坂本直寛一家

この写真は、直寛が北海道視察を終えて一旦高知へ戻り、自らが社長をつとめる北光社において募った移民団と共に北海道へ移住する直前、明治31年に高知で撮影されたものである。後列左から2番目が直寛、3人目が直、4人目が直の妻・留、中列左端が直の次男・直衛、4人目が直寛の妻・鹿、前列左端が龍馬の姪・春猪、二人目が直寛の長男・直道である。直寛は郷土坂本家5代目、直道は6代目に当たる。直の妻・留と次男・直衛は、直没後直寛のもとへ身を寄せており、今も浦臼の小高い丘に2人の墓がある。



坂本直寛（5代目）



坂本直道（6代目）



坂本彌太郎（7代目）



坂本直行（8代目）

箱館（函館）に渡った龍馬ゆかりの人々

《澤辺琢磨》伝道に捧げた生涯

澤辺琢磨（旧名・山本数馬）は、天保六（1835）年一月生まれで龍馬の縁戚にあたり、同い年の幼なじみでした。

江戸・士学館道場で剣術修行中の安政四（1857）年八月、酒に酔ってトラブルを起こし、不名誉な事件のため切腹させられる恐れもあったところを龍馬と武市半平太の計らいで逃亡しました。

その後、日本国郵政の創設者となった前島密と共に箱館に渡り、やがて同地の神明社（現山上大神宮）に婿入りして澤辺姓を継ぎ宮司となります。

その後、ギリシャ正教布教のため箱館に滞在していたニコライ神父の信念に満ちた教義に心を動かされ、明治元（1868）年四月、現在の函館ハリストス正教会の地で日本人として初めて洗礼を受け、後に司祭にもなりました。

晩年は東京神田駿河台のニコライ堂建立にも尽力しています。



《坂本直》海援隊で活躍、龍馬の跡目を相続

坂本直の幼名は高松太郎といい天保十三（1842）年十一月、土佐郷士・高松順蔵の長男として生まれました。母は龍馬の長姉・千鶴で、龍馬の甥っ子にあたります。

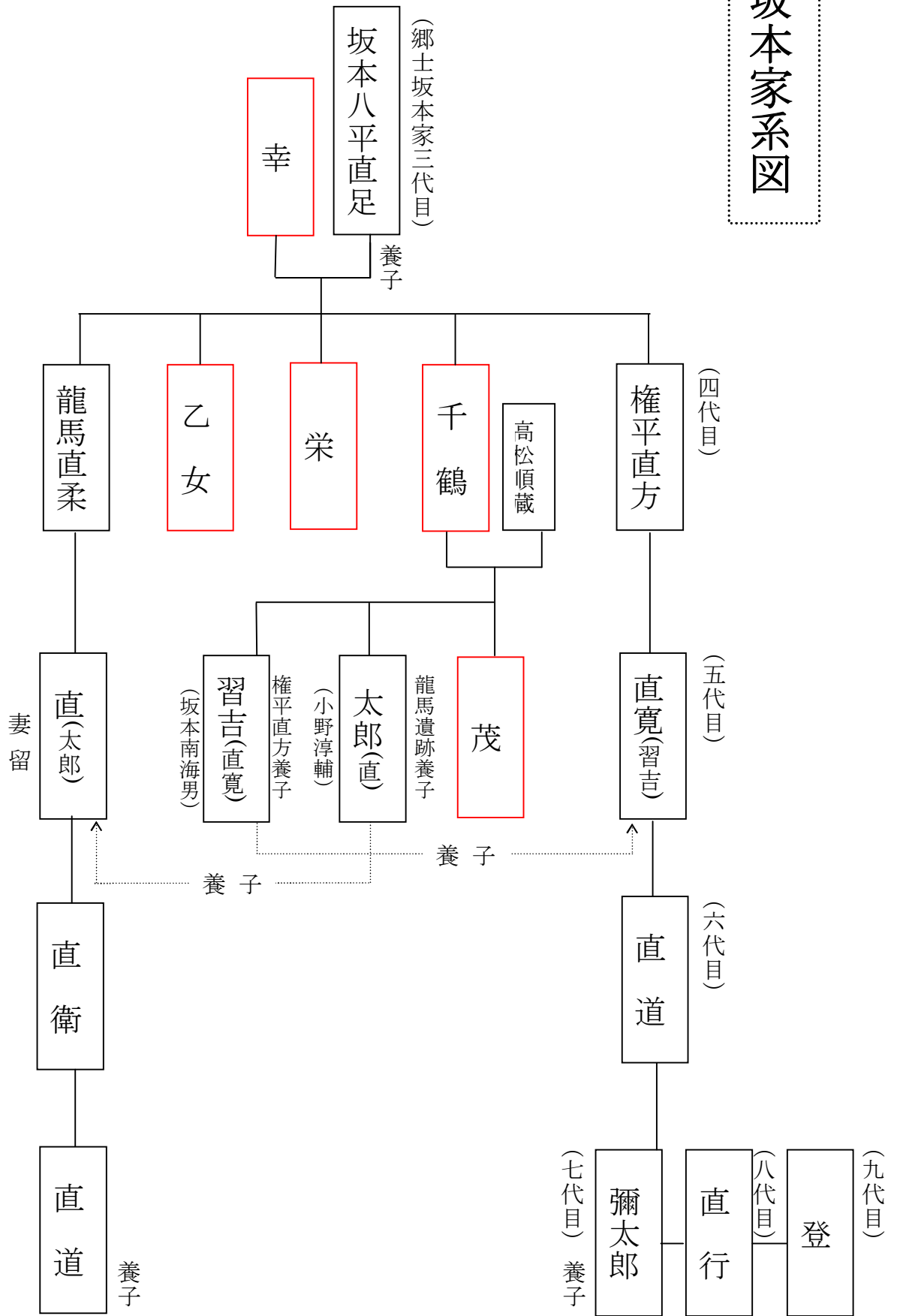
文久元（1861）年九月、土佐勤王党に加盟して尊皇攘夷運動に奔走していましたが、文久三年一月、叔父龍馬に誘われて勝海舟の門下生となり、海軍術を学びました。以後龍馬と共に行動して亀山社中や海援隊の中心人物の一人として活躍します。

慶応三（1869）年に小野淳輔と改名。かつて龍馬と共に蝦夷地開拓に向けて行動していたこともあり、蝦夷地経営に関する建白書を新政府に提出。慶応四年には、五稜郭に置かれた箱館裁判所（後の箱館府、もとの箱館奉行所の建物）において権判事・外国方主任担当官となり、明治二（1869）年には新政府軍の一員として箱館戦争にも従軍しています。

明治四年、朝廷の命により坂本龍馬の跡目を相続して養子となり、坂本直と改名。その後は、東京府典事、宮内省雑掌等を歴任しました。



坂本家系図



龍馬語録

- 世の人は我を何とも言わば言え 我がなすことは我のみぞ知る（和歌）
- 日本を今一度せんたくいたし申し候（文久3年6月29日付乙女宛書簡）
- 世に生きものというものは、人間も犬も虫もみな同じ衆生で、上下などはない（書簡）
- 世に生を得るは、事を成すにあり（英将秘訣）

同志たちが語った龍馬評

- 「坂本龍馬がおれに『先生は度々、西郷の人物を称せられるから、拙者も行って会って来るにより、添書をくれ』といったから早速書いてやったが、その後、坂本が薩摩から帰って来て云うには『成程、西郷という奴は、わからぬ奴だ。少し叩けば少しく響き、大きく叩けば大きく響く。もし馬鹿なら大きな馬鹿で利口なら大きな利口だろう』といったが坂本も中々鑑識かんしきのある奴だよ」（勝海舟 『氷川清話』より）

- 「天下に有志あり、余われ多く之と交はる。然れども度量の大、龍馬に如くもの、未だ曾て之を見ず。龍馬の度量や到底測るべからず」（西郷隆盛／千頭清臣 『坂本龍馬』より）

- 「龍馬は、小事にあくせくせず、一切、辺幅へんぷくを飾らず、人との交際は、すこぶる温厚、厭味というもの一点も無く、婦人も馴れ、童子も親しむ。

相手の話を黙って聴き、否とも応とも、何とも言わず、散々、人に喋らして置いて、後に、さて拙者の説じゆんはと諄じゆんと説き出し、縷々るる数百千言、時々、滑稽を交へ、自らか 呵呵大笑する。誠に天真の愛嬌家であった。

国を出づる時に、父母より訓戒の辞を書して与えられたのを、丁寧に紙に包み、上に「守」の一字を書き加え、袋に入れて常に懐中したなどは、豪宕ごうとうにして、而も赤子の如く、愛すべき所があった」

（関義臣／海援隊士）



蝦夷地の坂本龍馬像（総高6m）

龍馬ゆかりの地

